

III 遺 跡

1 遺 跡 の 概 観

6ABO 区の東半部から検出した主な遺構は、建物30棟・柵および築地 8 条・溝 7 条・井戸 2 箇所・土壌などである。遺構の主体は掘立柱の建物で、多様な規模のものが幾重にも重複している。これは同一地域に時期を異にして造営が行われているためであり、このことは当地区のみの特色ではなく、その後の調査でも認められる傾向であつて、宮内全域に共通している。

6ABO 区の周囲や建物群の間には、柵や築地が発見されている。周囲を限るものには、遺構の主な
特色6ABO 区と 6ABB 区の境界付近を南北に走る築地や 6ABO 区南部を東西に走るそれがある。前者は数時期にわたつて同一位置を占めているのに、後者は時期によつてわずかつつ移動している。これらの存在は、6ABO 区がまとまつた一つの地域を構成するものであることを示している。6ABO 区内を分割するものには、南北に走る数条の柵があり、さらに小区域にわたる小規模な柵が数条発見されている。

溝には、宮造営以前の旧地形によるものもあるが、6ABO 区の北辺と南辺を東西に走る溝はいずれも境界に関係するものと考えられる。他に建物の雨落溝とみられるものもある。

井戸は 6ABO 区で 3 箇所発見しており、東半部に 2 箇所ある。いずれも長方形の板材を井籠に組んだ大形のものである。この井戸は、いずれも改造され、2 時期以上にわたつて使用されたことはほぼ確実である。位置からみると、建物と関連して配置されたようである。

土壌は塵芥や廃材を処理するためのものが主で、とくに 6ABO-B・C 地区の木簡を出土した SK219 は遺構の性格や年代決定の指針になつた。

造営前の地形は、地山が 6ABO 区中央付近から東へむかつて傾斜し、東端ちかくでは急勾配にさがる。西半部でも西にさがる傾向にある。現地形は中央部にあつた尾根を削平して整地した様相を示している。現在残る地山面の比高差は中央と両端では約 1m ほどである。地山面で発見した遺構は、SD141・337・338 と SX500 で、いずれも宮造営前のものである。

造営前の地形

地山面上の盛土層は、大別すると 3 層に分かれ、それぞれ下から第Ⅰ期・第Ⅱ期・第Ⅲ期盛土層と名付けた (Fig. 2)。第Ⅰ期盛土層は、B・I 地区中央から G・J 地区の中央にかけて盛られた厚さ 5~10cm ほどの黄褐色の地山に似た土層で、このときに同時に東の地山のさがりを埋め立てている。これらはいずれも 6ABO 区内の最下の整地層である。中央部と東部での盛土上面比高差は約 30cm 強である。出土層位からこの期に属すると判定できる遺構は、SB205・317、SD126A である。*

3 期の盛土層

第Ⅱ期盛土層は、バラス混りの褐色土で厚さ 20cm ほどあり、A~D 地区東端と J 地区南端をのぞくほぼ全域をおおい、別にあげる遺構以外はほとんどがこの盛土上に造営されている。

* 造営前の地形と盛土の過程については、『平城宮報告Ⅱ』第Ⅳ章第 1 節で述べた。

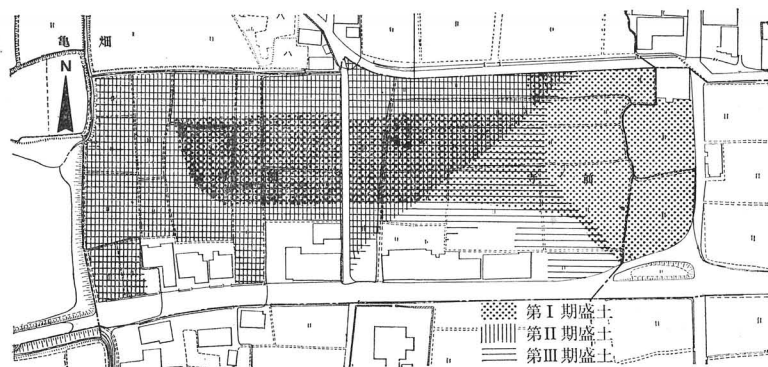


Fig. 2 各造営期の盛土分布図

とくに、この期の盛土上では建物が重複しており、造営期は3小期にわけられる。

第Ⅲ期盛土層は厚さ 10 cm ほどで、少量の土器・瓦片をふくむ粘質土である。J 地区南部から B・C 地区中央部にかけて顕著だが、その他では耕作によつて削去されたところも多い。出土層位から第Ⅲ期と判定できる遺構は、SB236・246, SK234・238 などである。

遺構の時期判別には出土層位によるほかにいくつかの手懸りがある。

柱穴の重複 同一層上で造営された遺構では、柱穴相互の重複関係から時期の前後を決定できるものとして次のものがある。SB205・206・209・211・327 の一群, SB200・201・299・314・317・SA304 の一群, SB 212・213・413 の一群, SB285 と 293などである。

配置の計画性 また、遺構の配置に柱通りを揃えるような計画性が認められることから、SB200・212・299・370 を同時期とし、SB201・206・209・213・364・293 を別の一群とすることが考えられ、SB327・321・314・285・273・211 の群と SB268・340・348 の群では、いずれも建物の間隔距離が10尺の倍数になり、柱間寸法にも共通性があることなどから、各々同時期のものと推定される。

以上のような状況と 6ABO 区西半部の知見を総合して、考察で述べるような第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ期と、さらに第Ⅱ期を3小期にわかつ編年ができたのである。

2 遺 構

記述の方針 6ABO 区東半部のうち、A・B・C 地区の西端部と I・J 地区の遺構は、すでに『平城宮報告Ⅱ』で記述したので、省略する。ただし、一部の遺構では前回の報告を補足改訂する必要がある生じたので、それらはふたたびとりあげることにした。

遺構は番号順に説明し、必要に応じて遺構相互の関係にもふれる。

SD 126 (PLAN 5・7, PL. 22・26)

A・I 地区を東から西に流れる素掘りの溝で、『平城宮報告Ⅱ』で記述した溝の東延長部にあたる。幅 1~2 m・深さ 0.5 m 前後であり、東に進むにしたがつて北に偏っている。『平城宮報告Ⅱ』p. 41・42

SD 130 (PLAN 6・8・9・11, PL. 13・14・28)

西半部で検出した東西方向の小石敷の溝の東延長部で、J・F・D 地区を通り、6ABB-E地区におよんでいる。F 地区中央西よりでは、小石敷が失われている。D 地区中央付近で、長さ

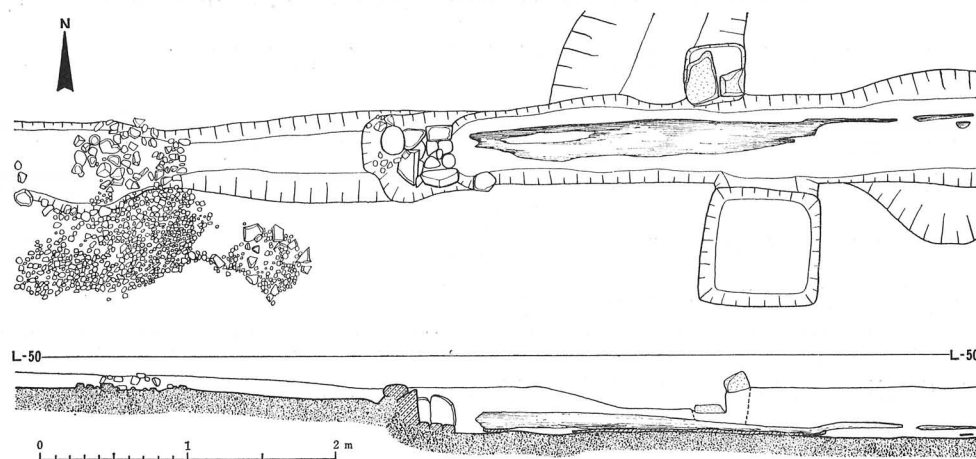


Fig. 3 SD130 石敷・木樋接続部

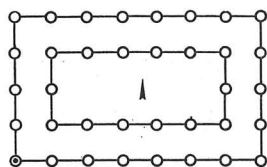
30 cm・幅 20 cm ほどの玉石を立てて組合せた段を設け、底を 30 cm ほどさげている。これより東は木樋を埋設している (Fig. 3)。木樋の部分は暗渠らしい。木樋の下から SB269 の柱穴を検出し、SD130 がおくれることがわかった。この付近で、SE272 付近から始まる SD271 が合流している。6ABB-E 地区では、SA350 と重複するが、旧地表面が削平されているので、前後関係は不明である。また、SD130 の西端も不明である。検出した部分の総延長は 200 m に達する。『平城宮報告Ⅱ』p. 41

南を限る溝

SD 141 (PLAN 4・6・8, PL. 20・21)

西半部から続き I・C 地区を東西に走る幅 1 m・深さ 0.3 m の素掘りの溝で、現存部総延長は 120 m である。盛土との関係や溝内の様相は西半部と同じである。『平城宮報告Ⅱ』p. 40

SB 200 (PLAN 6, PL. 6・20・21)



C・F・G 地区にまたがって検出した東西棟 7 間×4 間 4 面廂付の建物で、すでに報告したものだが、検討の結果、東西 19.30 m・南北 11.28 m で、柱間は、桁行中央間 3 間は各 2.67 m (9 尺)、その他の間は 2.82 m (9.5 尺)、梁行では 2.82 m (9.5 尺) 等間と判明した。*『平城宮報告Ⅱ』p. 42

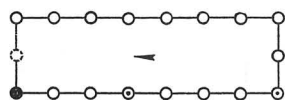
4 面廂建物

た。*『平城宮報告Ⅱ』p. 42

SA 204 (PLAN 4, PL. 8)

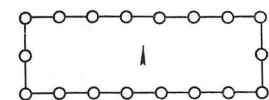
C・G 地区にわたる南北 10 間 (30 m) の柵で、柱穴は方 0.4 m・深さ 0.2 m ほどで小さい。SB206・209 と SB201 の間を画するもののようである。

SB 205 (PLAN 4, PL. 8)



B・C・G 地区にまたがって検出した南北棟 7 間×2 間の建物で、前回の報告後検討した結果、東西 20.43 m・南北 5.92 m で、柱間は、桁行では南端 2 間が 2.81 m (9.5 尺)、他は 2.96 m (10 尺) で、梁行は 2.96 m (10 尺) 等間とみられる。SB317 との中心間距離は 38.60 m (130 尺) である。『平城宮報告Ⅱ』p. 40

SB 212 (PLAN 5, PL. 22)



A・B 地区西部で SB200 の北 14.85 m (50 尺) にある東西棟 7 間×2 間の建物である。前回の報告後の検討で、東西 18.90 m・南北

* 模式図凡例 ●柱根 ●柱痕跡 ○柱抜取痕跡 ○柱穴のみ ■礎石 □礎石痕跡 ……推定 ▲は北をしめす。

6.00 m で、柱間は桁行では 2.70 m (9 尺) 等間、梁行では 3.00 m (10 尺) 等間と判明した。柱穴は方 0.8 m・深さ 0.8 m ほどのやや小形のものである。『平城宮報告Ⅱ』p. 42

SA 233 (PLAN 4, PL. 8)

東西分割の
柵

I 地区東よりで検出した南北方向の柵の南延長部を G 地区で見出した。検出部分の総延長は南北19間 (56.7 m) である。南端は民家の下に入つて未確認であり、北の 6ABN-M 地区にはなかつたから、6ABO 区の北の現在の道路付近で終るのであろう。『平城宮報告Ⅱ』p. 47

SD 267 (PLAN 5・8・9, PL. 10・12)

D・F 地区南部を東西に走る素掘りの溝で、F 地区西半では、幅 4 m・深さ 0.8 m と広いが、中央付近で狭くなり、それより東では幅 0.8 m・深さ 0.3 m ほどである。

SB 268 (PLAN 9, PL. 12)

D 地区南東部にある東西棟 3 間 (8.46 m) × 2 間 (4.75 m) の建物で、柱穴は方 0.9 m・深さ 0.7 m ほどである。柱間は、桁行 2.82 m (9.5 尺) 等間、梁行 2.38 m (8 尺) 等間である。

SB 269 (PLAN 9, PL. 12)

D 地区南東部にある南北の 2 柱穴からなる建造物で、柱間は 4.46 m である。柱穴は方 1.2 m・深さ 0.7 m で、径 36 cm の柱根を残していた。柱根の上を SD130 の木樋が通っていた。棟門のようなものが考えられるが、この南北に塀あるいは柵を検出してない。

SA 270 (PLAN 9, PL. 12)

D 地区南東部にある東西 4 間 (5.4 m) の柱穴列で、柱穴は方 0.4 m・深さ 0.3 m と小さい。

SD 271 (PLAN 9, PL. 11)

D 地区の SE272 の掘りかた付近から始まる浅い溝で、東へ 3 m ほどいつて南へ曲がる。

SE 272 B (PLAN 9・12, PL. 11・12・18, Fig. 4)

東の井戸

D 地区中央付近で検出した井戸である。上部で東西 6 m・南北 5 m、下部で方 3 m となる深さ 3.7 m ほどの土壌を掘り、なかに長方形の檜板材を内法 1.8 m の井籠組にして重ねた井戸枠をすえたものである。井戸枠は、下部 4 段分が残存しており、その上部 3 段の材は長さ 2.07 m・幅 0.30 m・厚さ 0.07 m であるが、最下 1 段は長さ 2.13 m・幅 0.36 m・厚さ 0.09 m と広く厚い。この材の両端を凹形にしたものと凸形に造り出したものとを仕口として組合せ、材の上下両面に 2 箇所ずつ目違の太杓を設けて枠を重ねている (Fig. 4)。最下段の枠材の上下面には、使用していない枘穴が各 2 箇所別にあり、太杓が残っていたものもあつた。この使用していない枘穴の間隔は広く、材も大形だから、この井戸より大きな前身井戸 (SE272 A) から

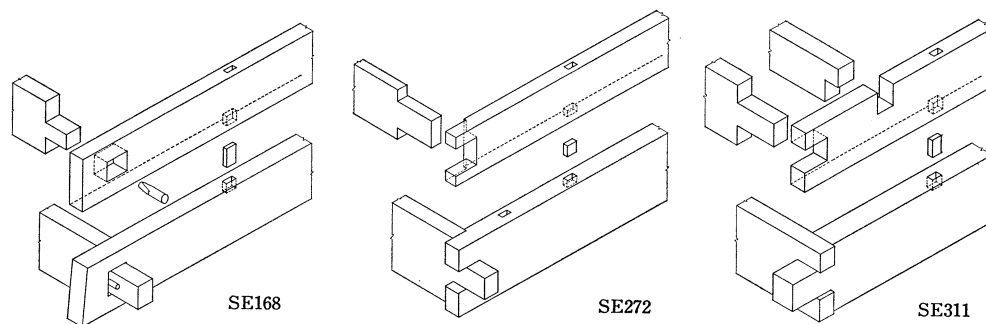
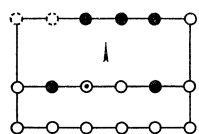


Fig. 4 井戸枠の組手仕口

の転用材であるとおもわれる。なお、上部の抜きとり穴には、井戸枿材の断片や径 0.2~0.3m ほどの玉石が数十個おちこんでいた。

前身井戸の
存在

SB 273 (PLAN 9, PL. 11・12)

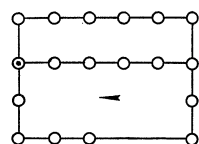


D 地区にある東西棟 5 間 (13.37 m) × 2 間 (8.61 m) 南廂付の建物である。この付近は厚い盛土層上に造営がなされていて、遺構の検出は困難であり、建物としてのまとまった柱穴のすべては検出できなかった。柱間は、桁行 2.67 m (9 尺) 等間、梁行は身舎で 5.35 m (18 尺)、廂で 3.27 m (11 尺) である。柱穴は方 0.9 m ・ 深さ 0.5 m ほどで、一部に径 0.3 m ほどの柱根を残していた。

SA 282 (PLAN 9, PL. 11)

D 地区中央部にある南北の柵で、全長 6 間 (9.8 m)、柱穴は径 0.4 m ・ 深さ 0.2 m である。

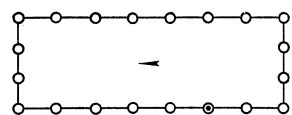
SB 285 (PLAN 8, PL. 11)



D・F 地区にまたがって検出した南北棟 5 間 (13.37 m) × 3 間 (9.50 m) 東廂付の建物で、柱間は、桁行 2.67 m (9 尺) 等間、梁行身舎 2.97 m (10 尺) 等間、廂 3.55 m (12 尺) である。柱穴は、身舎では方 1.2 m ・ 深さ 0.7 m、廂では方 1.0 m ・ 深さ 0.4 m と、廂がやや小さい。柱抜き穴から凝灰岩片や磚を出したものがある。西側柱列の南第 2 と 3 の柱穴はなく、この部分の柱を省いた特殊な構造の建物である。SB293 の柱穴と重複して、後のものであることがわかる。

側柱をはぶ
いた建物

SB 293 (PLAN 8, PL. 7・10)



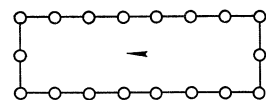
F 地区東部の南北棟 7 間 (20.80 m) × 3 間 (7.13 m) の建物で、身舎梁間は 3 間ある。柱間は桁行で 2.97 m (10 尺) 等間、梁行は 2.38 m (8 尺) 等間である。柱穴は方 1 m ・ 深さ 0.5 m ほどである。内部の北東隅よりに、小建造物 SB297 が納まっている。

身舎梁間 3
間建物

SB 297 (PLAN 8・9, PL. 7)

南北 3 間 (4.4 m) 東西 3 間 (4.0 m) の小建造物で、柱穴は径 0.7 m ・ 深さ 0.2 m ほどの浅いものである。建物内部に付属する収納設備などに関係するものであろうか。

SB 299 (PLAN 8, PL. 23)



C・F 地区にまたがって検出した南北棟 7 間 (18.71 m) × 2 間 (5.94 m) の建物で、柱間は、桁行 2.67 m (9 尺) 等間、梁行 2.97 m (10 尺) 等間である。柱穴は方 0.9 m ・ 深さ 0.6 m ほどである。内部に付属する SB300・389 がある。SB370 との間隔は 4.46 m (15 尺) で、南妻柱列は SB370 南妻・SB200 南側柱列と同一線上にある。西側柱列の西 1.8 m に幅 0.6 m の小石敷が 3 m 分ほど残存しているが、雨落溝であろう。

雨落溝

SB 300 (PLAN 8)

SB299 の南端内にある東西 4 m ・ 南北 1.6 m の小構築物で、柱穴は径 0.6 m ・ 深さ 0.2 m ほどである。東西両側は SB389 と揃っており、SB299 の一連の付設物であろう。

SA 301 (PLAN 8, PL. 10)

F 地区南部の南北小柱列で、3 間 (5.05 m) ある。柱穴は 0.3 m ・ 深さ 0.2 m と小さい。北端は SD130 に接してとまり、SD130 の北に想定される築地にとりついたものならば、第Ⅱ—1 期のものになる。

SB 302 (PLAN 6・8)

F 地区中央付近にある東西3間(3.3m)×南北2間(4.2m)の小建物で、柱穴は径0.5m・深さ0.3mほどである。

SA 304 (PLAN 5・6, PL. 9・10・21・26)

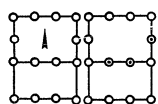
東半部中央
の柵

A・B・C・F 地区を南北に通る長い柵で、検出したのは22間(65.8m)あり、南北端は未確認である。柱穴は方0.8m・深さ0.6mある。柱間は2.99m(10尺)等間であるが、南第12柱間を3.89m(13尺)にひろげ、その南北の間を2.54m(8.5尺)に縮めたところがある。この部分はC地区西部のSA202・203の間の道路状部分の東延長上にあたり、柵の途中に開口部があつたとみられる。

SA 306 (PLAN 6, PL. 10)

F 地区南部の小柱穴列で、東西4間(6m)である。柱穴は径0.3m・深さ0.25mと小さい。

SB 307・308 (PLAN 6, PL. 10)



F 地区南部で検出した東西棟3間×3間南廂付の2棟の建物である。類似した平面を持ち、SB307は4.50m×6.45m、308は4.90m×6.54mとわずかにちがう。柱穴は径0.4m・深さ0.3mほどである。梁行寸法にわずかなちがいがあり、連続した1棟の建物にはならない。また、間隔も1.2mと近く、同時に存在したとすると、屋根の妻が重なる。おそらく、隣接敷地に造りかえたものであろう。

SK 310 (PLAN 6, PL. 6・10)

F 地区中央部の土壌で、東西5m・南北4m・深さ0.2mほどの不整楕円形のもので、なかに方1.5m・深さ0.4mほどの掘りかたがある。

SE 311 A (PLAN 6・13, PL. 6・15~17, Fig. 4)

中央の井戸

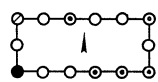
F 地区西よりにある井戸で、方7m・深さ4mほどの土壌を掘り、なかに長さ2.6m・幅0.36m・厚さ0.09mほどの檜板材を、内法2.25mの井籠組にして重ねて井戸枠としている。枠は下2段が残存していた。枠外隅に径0.05m・長さ1.0mの杭を打ちこんでいた。井戸底には礫を敷いており、その上面で、万年通宝・神功開宝その他の遺物を発見した。

SE 311 B (PLAN 7・13, PL. 6・15~17, Fig. 4)

改造した井戸

SE311Aは一度放棄され、泥土の堆積するままの状態にあつた。その下2段の枠を残して上部を撤去し、下1段の上面までの泥土をさらえ、その上にひとまわり小形の井戸を組み、再び用いている。組みなおしには、東と北はA井戸内に凝灰岩切石をならべ、その上に長さ2.1m・幅0.23m・厚さ0.09mの材をおいて、A井戸枠に渡りあごに組みこんでおり、南は長さ2.2m・幅0.27m・厚さ0.09mの材をA井戸枠外からあてて枠とし、西はA井戸枠上に凝灰岩切石片をならべて、東・北の枠の上面にそろうようにしている。内法はほぼ方1.9mである。南の材には、長さ0.15mと0.1mの角釘を釘彫りして打ちこんでいる。転用材であろう。このB井戸のなかには、隆平永宝・木簡などを含む多量の遺物と植物遺体が埋没していた。

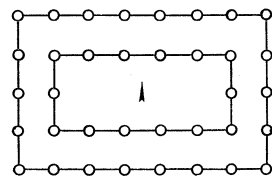
SB 314 (PLAN 6, PL. 6・9)



F 地区にある東西棟5間(10.65m)×2間(4.24m)の建物である。柱間は桁行・梁行ともに2.13m(7尺)等間である。柱穴は方1.2m・深さ0.5mほどで、径0.3mほどの柱痕跡と柱根を残すものがあり、また多数の凝灰岩切石片を柱穴底部

に敷いたような状態で検出したものがある。SB327・285 などと北側柱列が同一線上にあり、同時造営とみられる。

SB 317 (PLAN 6・8, PL. 20・21)



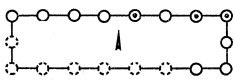
C・F 地区にまたがる東西棟 7 間 (19.16 m) × 4 間 (12.18 m) 4 面廂付の建物である。柱間は、桁行中央 3 間が 2.82 m (9.5 尺), 他は 2.67 m (9 尺) で、梁行では身舎 2.97 m (10 尺) 等間、廂は 3.12 m (10.5 尺) となる。したがって、4 隅の間が正方形にならない。柱穴は方 1.2 m ・ 深さ 0.8 m ほどである。SB200・201 と西端で重複し掘りとられた柱穴もある。

4 面廂付建物

SB 320 (PLAN 6)

F 地区西南隅にある東西 2 個の柱穴で、建物の東北隅とおもわれる。柱間 2.97 m, 柱穴方 0.9 m ・ 深さ 0.7 m ほどである。南は SD267 で破壊され、西は民家の下になる。

SB 321 (PLAN 4・6, PL. 5)



F・G 地区南端にある東西棟 7 間 (16.57 m) × 2 間 (4.14 m) の建物である。柱間は桁行 2.37 m (8 尺) 等間、梁行 2.07 m (7 尺) 等間で、柱穴は方 0.8 m ・ 深さ 0.7 m である。南側・西妻柱列の大部分は民家の下になり、未発掘である。

SA 322 (PLAN 6, PL. 6)

F 地区西辺に近く南北に走る柵で、10 間 (16.4 m) ある。柱間は 1.64 m (5.5 尺) ほどで、柱穴は径 0.4 m ・ 深さ 0.15 m ほどである。

SB 323 (PLAN 6, PL. 6)

F・G 地区にまたがる南北棟 3 間 (5.34 m) × 2 間 (4.16 m) の小建物で、柱穴も径 0.5 m ・ 深さ 0.2 m と小さい。

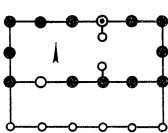
SB 324 (PLAN 4・6)

G 地区東南隅にある方 1 間の小建物である。南北は 2.67 m 東西は 3.12 m で、柱穴は径 0.5 m ・ 深さ 0.2 m と小さい。

SK 326 (PLAN 4)

G 地区にある東西 2.3 m ・ 南北 1.9 m ・ 深さ 0.5 m の土壇で、少量の土器が出土している。

SB 327 (PLAN 4, PL. 8・9)



G 地区にある東西棟 5 間 × 3 間南廂付の建物である。この建物では柱根の残存状態が良好で、桁行柱間寸法実測値は Tab. 1 のようになり、梁行は北第 1 間が 2.397 m, 第 2 間が 2.400 m であり、廂の間は柱根が残存しないが 3.58 m ほどである。柱穴は、身舎のものが方 1.1 m ・ 深さ 0.9 m ほどで、南廂のものは方 0.8 m ・ 深さ 0.3 m と小さい。身舎内の東第 3 柱位置に方立柱とみられる方 0.7 m ・ 深さ 0.2 m ほどの穴が 2 個あり、ここで東西に分割されていたとみられる。東妻の東 2.54 m (8.5 尺) に径 0.5 m ・ 深さ 0.2 m ほどの南北小柱穴列があり、縁あるいは東廂がつくのかと考えられる。

保存のよい柱根

SA 332 (PLAN 4, PL. 8)

G 地区南部にある東西 4 間 (7.5 m)

の柱穴列で、柱穴は方 0.4 m ・ 深さ 0.2 m ほどである。

柱 間	W 1-2	2-3	3-4	4-5	5-6 E
北側柱間寸法	2.389	2.368	4.734		2.270
南入側柱間寸法		4.822	2.400	2.350	2.360

Tab. 1 SB 327 桁行柱間寸法実測値 単位 m

SK 335 (PLAN 4, PL. 7・8)

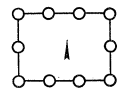
G 地区西部を南北にのびる幅約 3 m・深さ 0.2 m の溝状の土壌で SB206 をおおっている。

SD 337・338 (PLAN 7・9~11, PL. 26・27・29)

造営前の溝

6ABO 区の東端を西北から東南へ走る溝で、前者は幅 3~5 m・深さ 1 m、後者は幅 2 m・深さ 0.3 m ほどある。この溝と付近の低地を埋めて整地し、その上に造営がなされている。

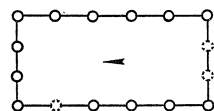
SB 340 (PLAN 7・11, PL. 27)



C 地区東端にある東西棟 3 間 (7.13 m)×2 間 (5.05 m) の建物である。桁行柱間は 2.38 m (8 尺) 等間だが、梁行は北の間が 2.67 m (9 尺)、南の間が 2.38 m (8 尺) になつてゐる。柱穴は方 0.8 m・深さ 0.7 m ほどである。SB268・273・348 との間隔は、それぞれ 29.75 m (100 尺)・10.69 m (36 尺)・11.88 m (40 尺) となり、同時造営とみられる。

SB 341 (PLAN 10, PL. 27)

身舎梁行 3 間の建物



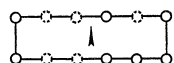
B・C 地区東端にある南北棟 5 間 (15.00 m)×3 間 (7.18 m) の建物で、身舎梁行が 3 間になつてゐる。柱間は、桁行 3.00 m (10 尺) 等間、梁行 2.39 m (8 尺) 等間である。柱穴は方 0.8 m・深さ 0.5 m ほどである。

SB348 の柱穴と重複し、先行するものであることがわかる。また、SB364 の南側柱列と北妻柱列が同一線上にある。同一計画によるものであろう。この建物は盛土上に造営され、柱穴の検出は困難で、一部検出できなかつたものがある。

SB 343 (PLAN 10)

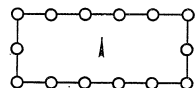
C 地区東端、SB341 のなかで検出した南北 2 個の柱穴からなる構造物である。柱間は約 3 m (10 尺) で、柱穴は方 0.8 m・深さ 0.3 m ほどである。

SB 347 (PLAN 7・10)



B 地区東端にある東西棟 5 間 (11.85 m)×1 間 (3.27 m) の建物である。柱間は、桁行 2.37 m (8 尺) 等間、梁行 3.27 m (11 尺) で、柱穴は方 0.7 m・深さ 0.3 m ほどである。検出できなかつた柱穴も多い。

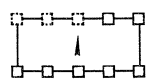
SB 348 (PLAN 7, PL. 27)



B 地区の東端にある東西棟 5 間 (13.35 m)×2 間 (5.35 m) の建物である。柱間は 2.67 m (9 尺) 等間で柱穴は方 1.1 m・深さ 0.5 m ほどである。

SB 349 (PLAN 7, PL. 27)

礎石の建物

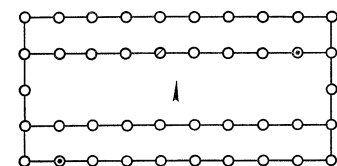


A 地区東端にある東西棟 4 間 (9.51 m)×2 間 (4.16 m) の建物である。柱間は、桁行では 2.37 m (8 尺) 等間、梁行は 2.08 m (7 尺) 等間である。柱位置には方 0.9 m・深さ 0.1 m ほどの浅い掘りかたに礎石の根石が残つてゐるので、掘立柱ではない。掘りかたが浅いため、削平されて痕跡のないものもある。

SA 350 (PLAN 7・10, PL. 27)

6ABO 区の東辺を南北に走る築地。幅 4 m で、上部は削平され、南では検出困難である。

SB 364 (PLAN 7, PL. 24・26)



A・B 区にまたがる東西棟 9 間 (24.06 m)×4 間 (10.83 m) 南北廂付の建物である。柱間は、桁行 2.67 m (9 尺) 等間、梁行 2.71 m (9 尺) 等間であつて、桁行と梁行の造営尺がち

がつた可能性がある。柱穴は方 1.1 m・深さ 0.5 m である。内部に SB366・377 が付設されている。南北側柱から約 1.5 m 外にある SD369 と SD374 は雨落溝で、SD400 に接続するもの
雨落溝
であろう。

SB 366 (PLAN 7, PL. 24・25)

SB364 北廂内にある東西 5 間 (6.24 m)×南北 1 間 (1.49 m) の小構造物である。柱穴は方 0.5 m・深さ 0.15 m ほどである。独立建物でなく、建物内部の付設設備であろう。

SB 370 (PLAN 7・8, PL. 23)

C・D 地区にまたがる南北棟 7 間 (18.71 m)×2 間 (5.94 m) の建物である。柱間は、桁行 2.67 m (9 尺) 等間、梁行 2.97 m (10 尺) 等間である。柱穴は方 0.7 m・深さ 0.4 m ほどで、うち 2 個所の柱穴は検出できなかった。平面は西に並列する SB299 とまったく同一で、柱通りもそろい、同時の計画造営とみられる。内部に SB371 を設備している。西と北をめぐる幅 0.4 m・深さ 0.1 m の素掘りの溝 SD370
東西に並列する建物
がある。雨落溝であろう。

SB 371 (PLAN 8, PL. 23)

SB370 の内部に設けられた南北 9 間 (12 m)×東西 2 間 (3 m) の付設物である。柱穴は径 0.3 m・深さ 0.2 m ほどである。

SB 375 (PLAN 7, PL. 24)

SB364 の内にある東西 1.5 m・南北 1.35 m の各 1 間の構造物で、SB364 の付設物であろう。

SB 377 (PLAN 7, PL. 24)

A 地区で SB 364 の内部にある南北 3 間 (3.5 m)×東西 1 間 (1.4 m)、柱穴径 0.45 m の小構造物。SB364 の付設物かともみられるが、本建物の柱穴 1 個所を中にとりかこんでいる点とは他の場合と状況を異にしており、付設物と断定するのに疑問がある。

SB 386 (PLAN 7, PL. 24)

A 地区で SB364 の北部に重なる東西棟 5 間 (11.88 m)×2 間 (4.75 m) の建物で、柱間は 2.38 m (8 尺) 等間、柱穴は方 0.75 m・深さ 0.5 m ほどのものが多く、柱痕だけで掘りかたは不明のものがある。

SB 389 (PLAN 7・8, PL. 23)

SB299 内にある南北 3 間 (4 m)×東西 3 間 (3.8 m) の構造物で、柱穴は径 0.8 m・深さ 0.2 m ほどである。西側柱を延長した形で北に一列にならぶ柱穴が 5 個所ある。SB300 とともに SB299 に付設されたものとみられる。

SA 397・399 (PLAN 5)

SA397 は B 地区に、SA399 は A 地区にあり、どちらも小掘立柱を 2 本東西にならべた構造物である。柱間は 1.5 m 強ほどである。SB364 と SB213 のちょうど中央付近で両建物の棟通りに対し南北対称に配置されている点から同時期のものと考えられる。

SD 400 (PLAN 5・7, PL. 26 Fig. 5)

A・B 地区にわたって SB364 の西 2 m を南北に走る幅 1 m ほどの石敷溝。溝の西側の一部に平瓦をならべている。北端は SB364 北

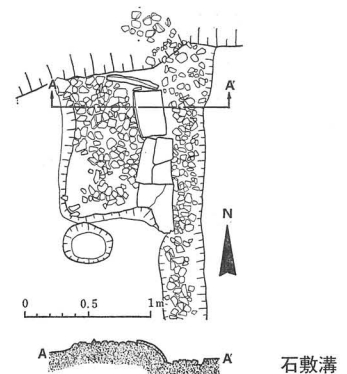


Fig. 5 SD400 北半部

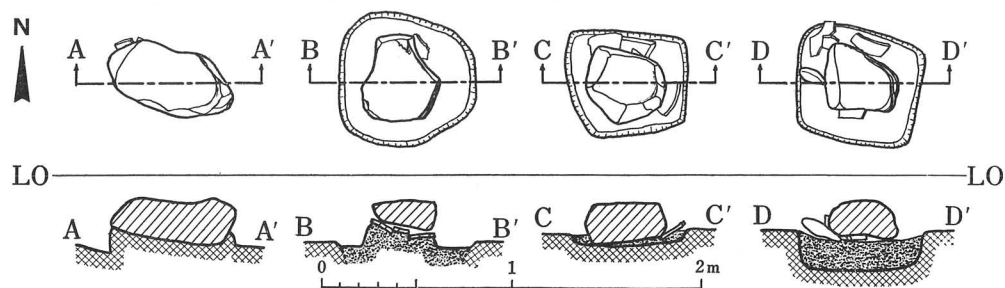


Fig. 6 SB413 礎石

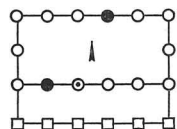
側柱筋の北 1.5 m, 南端も南側柱筋から南 1.5 m までとまっている。SB 364 の雨落設備であろう。

SA 412 (PLAN 5・6, PL. 20・21)

C 地区で SB201 の北 3.4 m を東西に走る小柱列である。全長は 6 間 (16.8 m) あり、西端の 1 間は 1.8 m (6 尺), 他はすべて 3 m (10 尺) 等間にちかい。中央を SB201 中軸線に合わせている点, SB201 に付属して SB213 との間をへだてる柵である可能性がある。このように考えると, 西方の SA204 も SB206・209 の東にほぼ平行して走り, 南は SB206 の南端近くから始まり, 北はほぼ SA412 の西方延長線上で留まっていた, SA412・204 は SB201 とこれをとりまく SB206・209・213 の 3 棟を区別するための柵のようなものと考えられる。

SB 413 (PLAN 5, PL. 25 Fig. 6)

掘立柱・礎石混用建物



B 地区で SB212 東端に重なる東西棟 5 間 (11.88 m) × 3 間 (8.52 m) の南廂付の建物である。柱間は、桁行 2.37 m (8 尺) 等間、梁行は身舎 2.69 m (9 尺) 等間、廂は 3.14 m (10.5 尺) となっている。身舎は柱穴が方 1 m ・ 深さ 0.6 m の掘立柱であるが、廂柱は小礎石 (Fig. 6) をもちいている。残存する身舎の掘立柱根と廂礎石との通りが悪く、身舎柱と廂柱との間に繋梁がないものかも知れない。棟通り下の西より梁位置とはややずれて小柱穴があるが、東半には残存せず、板床があつたとは断定できない。

SD 431 (PLAN 5, PL. 22)

A 地区北方から SD126 に合流する幅 1 m ・ 深さ 0.3 m の南北溝である。径 2 m ・ 深さ 0.7 m の SK430 は落口であろう。

SA 436 (PLAN 9・14, PL. 29)

E 地区にある幅 3 m 強の土壇で、上に礎石 2 と抜穴 1 が東西一直線上に 8.25 m おいて配置されている。壇の高さは 0.3 m ほどで北側に幅 1 m ほどの浅い溝がある。

SX 500 (PLAN 10・11・14, PL. 29)

宮造営で壊
わされた古
墳

宮造営にあたって埋められた前方後円墳の周濠で南西隅の外岸を D 地区で検出した。20 度強の勾配の斜面に葺石があつたとみられるが、最下の濠底に接する部分の大形玉石列のみ残存していた。この古墳は全長約 260 m ほどと推定され、現在の平城天皇楊梅陵が後円部にあたる。

SD 572 (PLAN 10・11, PL. 29)

D・E 地区を南北にとおる幅 2~3 m ・ 深さ 2 m ほどの溝である。

SD 573 (PLAN 11, PL. 29)

SD 276 の東方部分が幅 2.5 m ほどに拡がって SD572 に合流する。